

未発表作品や新分野（通俗文学、探偵小説、戯曲・脚本、随筆、詩集）等の日本語作品を収録した画期的文学作品集。

第一期完結！

監修Ⅱ 中島利郎・河原功・下村作次郎

日本統治期 台湾文学集成

全20卷〈第一期〉



綠蔭書房



中島利郎



河原 功



下村作次郎

刊行にあたって

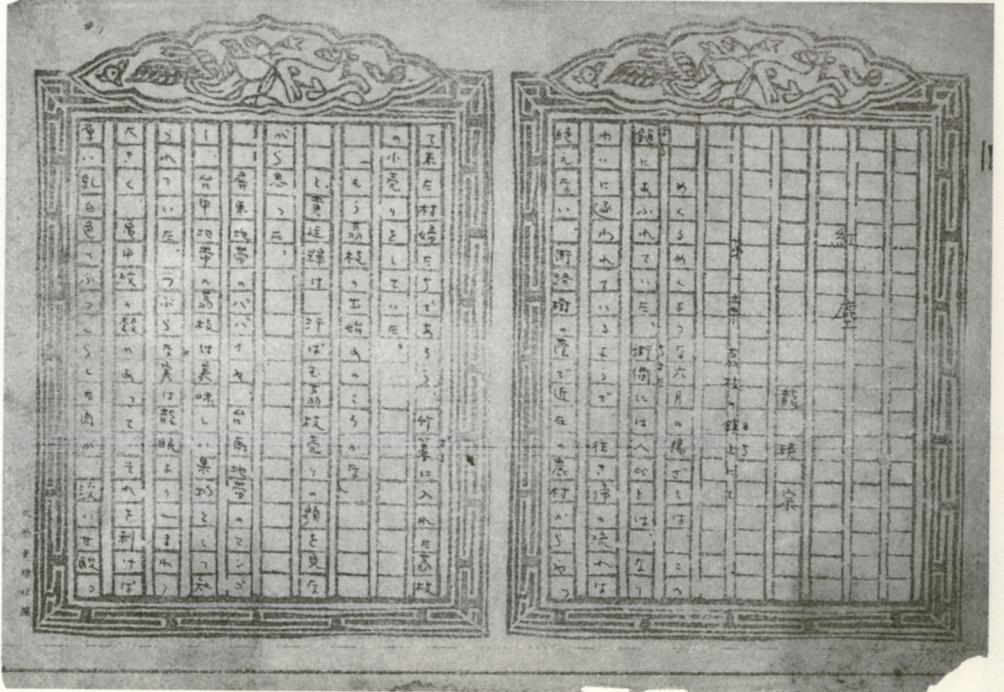
この数年来、『日本統治期台湾文学』資料復刻シリーズとして『日本人作家作品集』、『台湾人作家作品集』及び『文芸評論集』を刊行した(ともに緑蔭書房)。日本統治期の台湾文学の代表的作家とその作品を網羅し、研究資料として提供し幸い好評を得た。だが、内外の台湾文学研究は予想外の速度で深化し且つ拡大してきている。たとえば、張文環「山茶花」や王昶雄「淡水河の漣(いづれも『台湾新民報』連載の長篇小説)及び『呂赫若日記』等、戦前の重要な作品や作家の日記が発掘されて、作家・作品研究に大きな影響を与えている。また、近年台湾・前衛出版社より『台湾大衆文学系列』(第一輯全一〇巻)が下村作次郎・黄英哲両氏の編集により刊行され、台湾・南天書局からも『風月報』が全巻復刻されるなど、今までさほど注目を浴びなかつた台湾の大衆文学・通俗文学が文学研究の視野に入ってきたという具合である。さらに、近十年の日本、台湾、アメリカにおける戦前の台湾文学研究の急速な発展は相互の活発な国際交流と呼応してグローバルな関心呼び起こしている。

この度刊行する『日本統治期台湾文学集成』(第一期)は、以上のような台湾文学研究の深化と拡大を視野に入れ、戦前の台湾文学を、出来る限り原典や草稿に基づき、且つ網羅的に研究資料として提供する試みである。集成の第一期はすべて『日本語作品』を収録したが、第二期では『中国語作品』も収録の予定でいる。

本『集成』の刊行が、今後の台湾文学研究の発展に些かなりとも貢献できれば幸いである。

二〇〇二年六月

第一巻に所収した『紅塵』の草稿原稿



全巻の構成

1

台湾長篇小説集一

歴史の闇から続く小路

垂水千恵 (横浜国立大学教員)

日本統治期の台湾文学研究上の困難は、長らくその資料入手の難しさにあった。日本ではめったに会わない者同士が台湾の図書館で鉢合わせ、等と言う光景も、今となってはそれはそれで楽しい思い出ではあるが、しかし、台湾文学が研究のみならず、文学作品として幅広い読者に支えられていくためには、こうした奇形的状況は克服されていかなければならない。今回『日本統治期台湾文学集成』全二〇巻(第一期)が緑蔭書房から刊行されることは、『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』『同 台湾人作家作品集』『同 文芸評論集』の刊行によって数段に向上した台湾文学を取り巻く環境が、さらに画的に進むことを意味している。

今、その収録作品一覧を眺めているだけで興奮してくるが、私にとって特に待ち遠しいのは第三回配本の戯曲・脚本集である。戦時下の台湾では文学と並んで演劇においても皇民化運動が推進されたことは、侯孝賢映画『戲夢人生』などによって知る人ぞ知るの事実ではあるが、まだまだその実態は闇の中である。青年劇という名で何が試みられたのか、台湾における移動演劇と日本におけるそれとの関係はどうなっていたのか、まずは脚本が読まれないことには始まらない。そこには、演劇・映画・ラジオと、戦争は如何にメディアを駆使したかという、極めて今日の問題を解く鍵も潜んでいるはずである。さらに、メディアということ言えば、第二回配本に予定されている通俗文学・探偵小説の企画も興味深い。研究者に新しい視点を寄与するだけでなく、全く新規の読者が開拓される可能性もあるのではないだろうか。ともあれ、各配本、各巻ともにその刊行が待たれないものはない。歴史の闇と現代を結ぶ無数の小路への扉が、今、開かれようとしているのである。

● 編集・解説
下村作次郎(天理大学教授)

● 収録作品

『紅塵』龍瑛宗(草稿、一九七九年)

● 内容

龍瑛宗は、戦前、戦後の二つの苦難の時代を生きた台湾の小説家では稀有の存在である。龍の晩年の日本語作品は、台湾文学を戦前から戦後を通してその全体像とらえようとする時、決して見落としてはならない。日本統治下の台湾で生み出された台湾文学が、果していま我々に何を語りかけようとしているのか。そうした問いを検証する意味からも、第一巻に戦後の日本語小説『紅塵』を配した意義がある。『紅塵』は、晩年に執筆を再開した一九七九年の作品。戦後プラスチック加工業を起す台湾人の新興産業資本家を通して、高度成長期の台湾社会を描いた龍瑛宗の唯一の長編小説である。

2

台湾長篇小説集二

● 編集

中島利郎(岐阜聖徳学園大学教授)

● 解説

柳書琴(台湾・静宜大学助教授)

● 収録作品

『山茶花』張文環(台湾新民報)一九四〇年二月三日〜五月一日

● 内容

『台湾新民報』の文芸編集者であった黄得時の企画「新鋭中篇創作」の中の一編として『台湾新民報』に長期連載された張文環の長編小説。台湾の農村を背景に二人の慕いあう男女の成長を張文環独特の筆致で描写した郷土小説。戦後の「地に這うもの」と双璧をなす張文環の代表作で、張文環研究に欠かせぬ一書。長くその所在が明らかとされなかった小説を初めて単行本化して研究者に提供する。

3

台湾長篇小説集三

● 編集・解説

河原功(成蹊高等学校教諭)

● 収録作品

『争へぬ運命』林輝焜(私家版、一九三三年)

● 内容

本作品は淡水信用組合在職中に書いたもので、『台湾新民報』が日刊(一九三三年)になって初めての新聞連載小説である。一九三三年、台湾人の手になる日本語作品としては最初に出版された単行本として、台湾文学史上で記念碑的存在となった。

台湾文学研究の新たな深化を 促す発掘資料を集成

野間信幸 (東洋大学文学部教授)

この文学集成には、これまで刊行されてきた作品集や資料集よりも、さらに一段深い鉅脈を掘り起こした成果が集められている。

ここ数年來、日本統治期の台湾文学関係の作品や資料は復刻に恵まれ、一昔前なら想像もつかぬほどに研究環境は整備されてきた。研究が深化してくれば、ますます資料が欲しくなる。そこで新たな資料を求めて各種研究機関に通い、あるいは台湾に向いて資料収集に努めることになる。ただし個人的な努力には限界もあって、どうしても目的の資料に行き着けなかったり、欠号欠頁の部分が埋まらぬままであつたりして、壁に当たつてしまうこともあつた。

ところが、これほど苦勞する資料収集を、傍目には難なくやつてのける名人がいる。滅多なことでお目にかかれない稀覯本を、しっかり所蔵している蔵書家がいる。遠慮が先にたつてなかなか会見を求めにくい老作家や遺族とも、人柄を見込まれてか信頼関係まで築いてしまふ猛者がいる。

こうした資料収集の達人たちが集めた資料を持ち寄つて、この文学集成が編集されることになつたのである。

編集姿勢のしんとしたところは、既刊資料集の同工異曲としていないところにかがえる。本集成には、草稿から単行本化される超一級の資料が含まれている。原載紙誌が長らく見つからず幻とまでいわれた作品が入つている。古書の値崩れをおこすにちがいない稀覯本が復刻されている。皇民化劇の作品や、これまでなかなか閲読できずにいた詩集も編入されている。

緑蔭書房は、またひとつ立派な出版業績を積むことになつた。このレベルの資料集が、然るべき図書館や研究機関で保管されることを望みたい。

4 台湾短篇小説集

編集・解説
中島利郎

収録作品

「生死の海」西川満編(台湾出版文化「文芸選書」、一九四四年)

「秋」濱田隼雄編(台湾出版文化「文芸選書」、一九四四年)

内容

両書で一〇名の作家を収録した日本人作家のアンソロジー小説集。共に昭和一八(一九四三)年末の台湾決戦会議の後、西川満の「大衆文学とは云わずとも、肩の凝らぬ楽に読める、そして皇国の道を外れぬ小説を書かねばならぬ」という提唱によつて編集・出版された。戦況悪化の中で刊行された個人編集では日本統治期最後の文芸単行本。

5 台湾純文学集一

編集・解説十作品目録
星名宏修(琉球大学教員)

収録作品

頼慶「妾御難」(フォルモサ一九三三年)

巫永福「山茶花」(台湾文芸一九三五年)

王育徳「過渡期」(翔風一九四二年)

楊雲萍「部落日記」(新建設一九四四年〜四五年)

他三七編収録

内容

本巻は小社刊行の「日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集」に収録されなかつた台湾人日本語作家の作品を集成。雑誌に掲載された純文学系の主要作品を網羅した。

6 台湾純文学集二

編集

星名宏修・中島利郎

解説十作品目録

星名宏修

収録作品

戦前期台湾文学に対するグロ ーバルな関心に応える企画

藤井省三（東京大学文学部教授）

戦前期の台湾文学をめくり、台湾でそして世界で初めての国際学会が開かれたのは、一九九四年新竹市・清華大学においてのことだった。そして日本でもその四年後には日本台湾学会の成立大会が東京大学で開催され、今年の名古屋大会に至るまで学術大会では毎年、文化・文学分科会において台湾・アメリカ等からの招聘研究者も交え、「決戦台湾小説集」をめぐる「台湾文学における佐藤春夫とその系譜」など一連のシンポジウムが企画されてきた。このような台湾・日本での動きに続き二〇〇二年にはニューヨーク・コロンビア大学において、「植民地統治下の台湾——一八九五——一九四五：歴史・文化・記憶」という北アメリカ最初の国際学会が開催されたのである。

この一〇年で世界が日本統治期台湾文学に注目し始めたのはなぜだろうか。その背景として、民主化を達成し経済発展を遂げて先進国入りを果たした台湾に対する、政治的経済的関心を先ず指摘できよう。台湾人による不屈の闘いの原点として日本統治期台湾があり、台湾人アイデンティティ形成の源流として植民地体験が注目されているのだ。そこには台湾を旧植民地のポスト・コロニアル体験の典型と見なす視点が介在していることは言うまでもない。また日本の近代文学とは欧化とともに東アジア進出により形成されたものであり、後者への十分な理解なくして現代日本文学も成り立ち得ない、という認識が深まってきた点も指摘できよう。

そして何よりも、日本と中国・東南アジアの周縁に位置する台湾が——戦後にはこの見取り図にアメリカの大きな影が加わるのだが——その周縁性ゆえに独自にして豊穡なる日本語文学を結実していた点に、現代世界の読者は感嘆しているのである。戦前期台湾文学に対するグローバルな関心に応えて登場した本集成は、世界各地で歓迎されることであろう。

小野文朗「霧映」(翔風一九三六年)

新田淳「池畔の家」(台湾時報一九四一年)

美濃信太郎「過客」(台湾公論一九四二年)

河野慶彦「扁柏の蔭」(文芸台湾一九四三年)

他二四編収録

内容

本巻は小社刊行の「日本統治期台湾文学 日本人作家作品集」に収録されなかった日本人作家の作品を集成。雑誌に掲載された純文学系の主要作品を網羅した。

7

台湾通俗文学集一

編集・解説十作品目録

中島利郎

収録作品

竹田右左之島人「夢の紅薔薇」(あぢさゐ一九三四年)

大野倭文子「空は紅い」(台湾婦人界一九三四年)

小島泰介「山行かば」(台湾警察時報一九三六年)

他一一編収録

内容

台湾文壇は「文芸台湾」や「台湾文学」に代表される純文学系の作品や作家によって形成されていたが、その一方で庶民が娯楽として楽しむ文芸作品もあった。いままで台湾文学研究の中ではほとんど顧みられなかった通俗文学を「台湾婦人界」などの雑誌から集成した。本集成第一期では日本語作品を7・8巻に収録した。なお、本集成第二期では「通俗文学集・中国語作品」を収録の予定。

8

台湾通俗文学集二

編集・解説

中島利郎

収録作品

柴田杜夜子「泥靴」(台湾婦人界一九三七年)

陳華培「男の氣持」(台湾婦人界一九三七—三八年)

大庭さち子「愛機に結ぶ」(台湾公論一九四五年)

他一八編収録

主要作者紹介

西川満 (にしかわ みつる)

一九〇八年〜一九九九年没。会津若松生。満二歳で渡台し、一九二〇年台北中学入学。一九三三年早稲田大学卒業。帰台後、『台湾日日新報』の文芸部長をつとめ、雑誌『文芸台湾』を創刊。一九四五年まで在。台湾文壇の日本人作家の代表的存在。主著は『梨花夫人』『赤嵌記』『台湾縦貫鉄道』など。



濱田隼雄 (はまだ はやお)

一九〇九年〜一九七三年没。仙台市生。戦前の台湾文学の日本人作家を代表する一人。一九二六年台北高等学校入学。三二年東北帝国大学卒業。三三年台北の私立静修女学校教師(のち台北師範学校教授)。一九二七年より創作活動に入り作品を多数発表。主著は『南方移民村』『台湾文学賞』『草創』など。



葉歩月 (イエ フユエ)

一九〇七年〜一九六八年没。台北市生。本名葉炳輝。三〇年台北医科専門学校卒業。三六年台北帝国大学医学部薬理学教室で杜聡明博士に指導を受ける。戦後直後『科学小説 長生不老』と『探偵小説 白昼の殺人』を上梓する。遺稿『七色の心』は、未発表の日本語長編小説である。



張文環 (チャン ウェンホワン)

一九〇九年〜一九七八年没。嘉義生。一九三三年台湾芸術研究会を組織し、雑誌『フォルモサ』を発行。三八年西川満主宰の『文芸台湾』に参加したが、四一年脱会し台湾人作家中心の『台湾文学』を創刊し長篇小説の代表作に『地に這うもの』(東京・現代文化社)がある。



9

台湾探偵小説集

編集・解説 十台湾小説年表

中島利郎

収録作品

飯岡刑事談「探偵実話・奇代の兇賊台北城下を騒す」(『台法月報』一九二〇年) 座光東平「犯罪小説・白金坩堝の行衛」(『台湾警察協会雑誌』一九二四〜二五年) 下村四郎「渦巻」(『台湾婦人界』一九三四年) 他二四編収録

内容

大衆文学の一端を担った「探偵小説」を大正期から編年式に集めた初めての「探偵小説集」。その歴史は古く、台湾新文学の草創期である大正期から一部の読者を獲得して人気を博していた。台湾の通俗小説・大衆小説研究に必読の資料集。

10

台湾戯曲・脚本集一

編集・解説

河原功

収録作品

『夜明けの歌』(国語普及の発行会、一九三〇年) 、『皇民化劇脚本集 軍夫の妻』(国民精神総動員台中州支部、一九三九年) 、『皇民化劇の手引』(台湾子供世界社、一九四〇年) 他三編収録

内容

日本統治下の台湾では、伝統的演劇の「歌仔戲」(コアヒ)をはじめ、全島的に演劇が大衆の支持を受けており、活動も盛んだった。しかし、日本語による演劇運動が盛んになるのは一九三〇年代なかばに入ってからのこと、台湾文学の発展と歩調を合わせてのことだった。はじめは、日本語を解さない台湾人に対する「日本語普及」を目的とするものだった。

11

台湾戯曲・脚本集二

編集・解説

河原功

収録作品

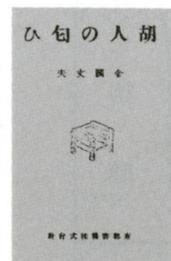
林輝焜 (リン フイクン)

尾崎孝子 (おだき こうこ)

一八九七年〜一九七〇年没。福島市生。本名カウ。「あらたま」の著名女流歌人。戦前八年間台湾に在住。戦後の日本で短歌総合誌「新日光」「歌壇新報」などで知られる。

金関丈夫 (かなせき たけお)

一八九七年〜一九八三年没。香川県生。自然人類学者。池田敏雄とともに雑誌「民俗台湾」を創刊。人類学はもとより、考古学、民俗学、言語学、文学に至る「金関学」とよばれる学問体系を確立。主著は「胡人の匂ひ」など。



龍瑛宗 (ロン イントゥオン)

一九一一年〜一九九九年没。新竹北埔生。日中戦争の前夜に「パイヤのある街」が「改造」懸賞入選作となり、中央文壇にデビューする。戦後は一時期「中華日報」「日文版」の主編として活躍したが、五〇年代以降恐怖政治の中で創作から遠のく。七〇年代後半から執筆を再開し、初の長編小説「紅塵」をはじめ小説、随筆、評論などを発表した。



一九〇二年?。淡水生。一九二八年京都帝国大学経済学部卒業後、台湾興業信託株式会社、淡水信用組合専務理事、厦門特別市政府実業科長等を歴任。

楊雲萍 (ヤン ユンピン)

一九〇六年〜二〇〇〇年没。詩人。作家でもあり、歴史家でもあり、多才な人物であった。正義感強く、曖昧や妥協を許さず人格的にも厳しい所があった。台湾最初の白話文芸誌「人人」を発行したり、詩集「山河」を上梓するなど、台湾文学でも重要な足跡を残した。



王白淵 (ワン バイユアン)

一九〇二年〜一九六五年没。波瀾に富んだ人生で不遇な人生を送った。東京美術学校師範科を卒業したが、美術教師の仕事はなく、盛岡女子師範学校での教師生活中の左翼運動で逮捕。さらに日本統治下の中国でも国民党政権下でも左翼思想を貫き通し、その代償を失職と投獄で払った。



『簡単な青年劇の演出法』(台湾総督府文教局社会課編、一九四〇年)

『手軽に出来る青少年劇脚本集 第一輯』(台湾総督府情報部、一九四一年)

● 内容
日本語の普及、日本精神の教化をはかる上で、演劇は予期したとおり大きな効果があった。そのため、演劇は、皇民化運動を展開する上で、文学同様に欠かせないものとなつていき、総督府として積極的に関与していくことになる。文教局では、中山佑に「青年劇の演出法」執筆を依頼する。情報部では、西川満、石田道雄、黄得時、龍瑛宗ら多くの作家や詩人に、新しい「青年劇」「少年劇」の制作を依頼する。その代表的な二著をここに収める。

12 台湾戯曲・脚本集三

● 編集・解説

河原功

● 収録作品

『青年演劇脚本集 第一輯』(皇民奉公会台北州支部健全娛樂指導班編、一九四二年)
『青年演劇脚本集 第二輯』(皇民奉公会台北州支部健全娛樂指導班編、一九四四年)

● 内容

皇民化運動と連動した演劇活動は、「青年団」の手によって台湾全島で展開されていく。その中心的役割を担うのは各地の皇民奉公会支部だった。なかでも台北州支部は、農村青年演劇に積極的だった。皇民化運動を推進するに有効な脚本の執筆を促し、「青年演劇脚本集」を二輯まで編纂している。皇民化運動を文学面、文化面から理解するためにも、この「脚本集」は必要文献である。

13 台湾戯曲・脚本集四

● 編集・解説

中島利郎

● 収録作品

『護郷兵』吉村敏(盛興書店出版部、一九四三年)
『一つの矢弾』吉村敏(台湾芸術社、一九四四年)

● 内容

皇民化時期にあつて、台湾の演劇運動に最も多くの足跡を残した一人に、吉村敏がいた。彼は、台北放送局に勤務し、皇民奉公会台北州支部の芸能指導部にも席を置いていた。台北志願兵制度の嚆矢「高砂義勇兵の祖」ともいうべきものを扱った「護郷兵」、芸能奉公団上演用の台本を集めた「一つの矢弾」を出版している。

夕立の間

今年、例年より一層暑く感ずる上に、名物の氣持よい夕立にあまり見舞はれなかつた。それがため、臺北の住民は、毎日あだかも淋しい雨の中で生活してゐるやうに、雨を一日千秋の思ひで待つてゐた。皮肉にも、雨どころか、黒雲さへ、日中にはめつたに見られない位だった。

實に、今年の六月は、無茶に暑かつた。ところが、月末の或る日の午後二時頃だった。黒白の叢雲が怒氣を帯びたやうに、今まで澄み切つた青空をおほふてしまつた。

「俺は、いくら考へても、いやだ。……ね！君、さうぢやないか？」

「まあ、うら、知らないわ。」

「どうも男女の對話が、階下の披露音器のレコードに混つて聞えた。

約二十分ばかり前、電光と雷聲とに追はれて、カフェー瀟湘の二階に逃げ込んで来た二人の青年……

……一人は、背廣服で、他は、黒セルの學生服で……が一つのテーブルを占めて向あつてゐた。

テーブルには、アイスクリームを入れたらしい皿が二つ、また、かたつけてゐなかつた。そして、二人の前には、約半分ぐらゐ残つてゐるイチゴソーダ水のカップが一つ宛置かれてある外、小さいガラス製の青花瓶と、四角形の白い灰皿とがならべてあつた。



犯罪嚴格な家の娘

鹿光東平

縦横線の列車上の人となつて、南部へ旅行する人は誰でも知つて居るが、嘉義駅から二つ目の停車場に後退といふ所がある。小つづけな停車場の割合に名が通つて居る。それは後退から四里許り東の方の山地へ入つた所に關子嶺といふ清濁二泉の温泉があつて、萬病に効能顯著だと昔々で、俗語で「關子嶺の湯」からである。後退から此の温泉へ行く途中に白河といふ田舎の町としては、一寸繁華な所がある。此處に新警察の警察分署がある。

今し白河分署の偵探警部補は部下の安田刑事を呼んで、

「安田君、關子嶺温泉の高砂旅館で、殺人があつたさうだ。關子嶺温泉分署からの電話に依つて、どうも他殺らしい、他殺とすれば死行は昨日の晝頃行はれたのだ。さうして、加害者は妙齡の婦人だとまで想像しなされども、兎に角、他殺が普通死の死か列ならぬから、

お習志の父親といふは、長崎縣の士族で、非常に嚴格な性質の持主であつたのだ。明治三十年警部補の警部補に就いて、渡臺して来たのであつた。爾來二十二年間は實に勤奮に實直であつたのだが、新しい知識の進歩を嫌ふと共に、彼は舊風習、列子やとして、同

14

台湾戯曲・脚本集五

●編集・解説十作品目録

中島利郎

●収録作品

『呉鳳の死』幸田青緑(台湾地方行政一九三八年)

『南方発展史』海の豪族』長谷川伸・片桐勝男(台湾時報一九四一年)

『サヨンの鐘』(台湾時報一九四三年)

他二五編収録

●内容

この巻には、雑誌に掲載された脚本類を集めた。『呉鳳の死』は教科書にも載つた有名な話で、映画化もされてゐる。濱田弥兵衛を主人公とする映画脚本『海の豪族』は、日本の南方進出を正当化するものであつた。『サヨンの鐘』は、暴風雨の中、応召となつた武田先生の荷物を運ぶ途中で足を滑らせて濁流にのまれたサヨンを称賛したもので、これは李香蘭主演の映画で大評判となつた。こうした興味深い脚本三〇編近くを収録した。

15

台湾随筆集一

●編集・解説

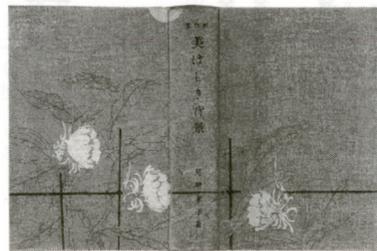
河原功

●収録作品

『美はしき背景』尾崎孝子(あらたま発行所一九二八年)

●内容

『あらたま』の著名女流歌人の初期作品。結婚まもなく台湾に行き、若年で夫を亡くす等辛苦を味わうが、創作への熱意は捨てなかつた。戦後日本で短歌総合誌『新日光』や『歌壇新報』等で知られるが台湾での活躍はあまり知られてゐない。本書は著者がみずみずしい感覚で『美はしき』を描く台湾物語。



16

台湾随筆集二

●編集・解説

中島利郎・下村作次郎

●収録作品

①『感想集』雨窓墨滴』陳逢源(興南新聞社、一九四二年)

②『孤獨な蠹魚』龍瑛宗(盛興出版部、一九四三年)

二つの「狂人日記」(2)

二つの「狂人日記」とはいふまでもなく、有名なゴオゴリの「狂人日記」(一九一八年作)と魯迅の「狂人日記」(一九一八年作)とのことを指したのであるが、魯迅のこの作品の創作動機は、ゴオゴリから暗示と影響を受けたらしい。といふのは、當時、魯迅のもつとも愛讀した作品はロシアのゴオゴリとポーランドのセンキウイツツであつたといはれてゐる。

ゴオゴリはロシア近代文學の鼻祖であり、魯迅も支那近代文學の始祖で共に苛烈なリアリズムで諷刺作家であるとは、おもしろい暗合だといへる。ゴオゴリをロシア近代文學鼻祖と書いたのは、僕の駄洒落でゴオゴリの作品を讀めば、誰もが氣付くやうに鼻のことがよく出てくる。だいち「鼻」といふ作品がある位だから。

ペリンスキイはゴオゴリの「狂人日記」についても、かう書いてゐる。

「諸君はこの痴人ボブリシチシを嘲笑してゐる氣でゐても、諸君のその笑ひは悲哀の中へ溶

● 内容見本(四)台湾詩集に所収

南方の果樹園

(1) 果樹園の春

春塵のなかに温潤を忘れた果樹園が愈ふ
大武半の静かなるやまなみのもと
その華麗な雲霧を山壁に合せて、

南國の強烈な放射線に交錯する、さまざまな色彩に粉飾された季節の果實、季節の花々が果樹園を埋めて
蜜のやうな甘やかな香が充滿してゐる、
聳え立つ椰子と檳榔の並樹にゆれる南風の光彩は

● 内容

① 興南新聞(台湾新民報)の改題紙の經濟部長であつた著者の文化・文芸評論集。台湾島内の雑誌及び「興南新聞」に発表した随筆類をまとめたもので、その内容は中国や台湾の古典文學から台湾風俗や執筆當時の時事文化や専門の経済分野にまで及び、著者の幅広い學識の一端が窺われる好著。
② 日本統治期に活躍した代表的日本語作家による台湾初の本格的文學隨筆集。當時の台湾人作家の文芸的需要の広さを知ることができ、且つ「龍瑛宗」の文學を研究するうえで絶対的に欠かせない一冊。

17

台湾随筆集三

● 編集・解説

中島利郎

● 収録作品

- ① 「胡人の匂ひ」金関丈夫(東都書籍、一九四三年)
- ② 「た、かひの蔭に」丸井妙子(台湾公論社出版部、一九四四年)

● 内容

① 才人金関丈夫の民俗學隨筆集。人類學や解剖學はもとより考古學、民俗學、言語學そして文學に至るまでの幅広い學識と才能をもち「金関學」とよばれる學問體系を確立した作者の台湾で最初の隨筆集。文學類ではないが「民俗台灣」の中心的存在となつた金関の才能が開花した記念的隨筆集。
② 戦況も悪化してきた昭和一九(一九四四年)に出版された隨筆集。台湾でも「決戦」が叫ばれる中、戦時の後方で汗を流し戦時に協力する労働者たちを女性を目を通して描く。台湾総督府情報課編「決戦台湾小説集」のドキュメント版といつてもよい隨筆集で、雑誌「台湾公論」に発表したものをまとめたもの。

18

台湾詩集

● 編集・解説

河原功

● 収録作品

- 「蕨の道」王白淵(盛岡・久保庄書店、一九三二年)
- 「その日暮しの中から」上忠司(台北・杉田書店、一九三五年)
- 「南方の果樹園」黒木謳子(屏東芸術聯盟、一九三七年)
- 「山河」楊雲萍(台北・清水書店、一九四二年)

● 内容

日本統治下の台湾文學での「詩人」としては、台湾文芸家協會の前身「台湾詩人協會」から、矢野峰人や西川満の名がすぐ思い浮かんでくる。しかし、詩を愛好する層は厚く、その一時代前に、話題性の高い詩集もたくさん出ていた。そのほとんどは、今では手にすることのできないものである。本集成ではそのうち重要詩集四冊を収録した。その中の「蕨の道」は台湾人が日本語で出版した最初の詩集である。

本「集成」の特色

●本集成の最大の特徴は、小社既刊の「日本統治期台湾文学」刊行時に未収集の諸作品を精選し、日本統治期台湾での代表的日本語小説をほぼ網羅した。加えて、台湾文学研究の更なる進展と深化にかんがみて、これまでの台湾文学研究の中であまり注目されなかった新たな研究分野＝通俗文学（7巻・8巻）、探偵小説（9巻）、戯曲・脚本（10巻～14巻）、詩（18巻）の作品群を網羅的に収録した。とくに「通俗文学集」は「台湾婦人界」などの通俗雑誌から初めての編集。「探偵小説集」は日台最初の探偵小説のアンソロジーである。

●未発表・所在不明の作品を収録。張文環の代表作の一つでありながら、その所在が不明であった「山茶花」（2巻）を初めて単行本化した。龍瑛宗の「紅塵」（1巻）は中国語訳の出版はあるが、今回保存されていた草稿（日本語を初めて活字化した。葉歩月の遺稿「七色の心」（20巻）は本集成が初出である。

●「日本統治期台湾文学」シリーズに収録されなかった純文学系の主要作品を網羅した（5巻・6巻）。

●台湾文学史にとつても記念碑的作品を収録。林輝焜「争へぬ運命」（2巻）は台湾人の日本語作品として出版された最初の単行本。西川満編「生死の海」。濱田隼雄編「秋」（4巻）は個人編集として日本統治期最後の文芸単行本。龍瑛宗「孤独な鳶魚」（16巻）は代表的日本語作家の台湾初の本格的文学随筆集。王白淵「棘の道」（18巻）は台湾人が日本語で出版した最初の詩集。葉歩月「七色の心」は日本語で書かれた台湾最初の大河小説。

●戦前の著名な作家の作家研究に不可欠と考え戦後作品＝龍瑛宗「紅塵」、葉歩月「長生不老」「白昼の殺人」「七色の心」も収録した。

●各巻の巻末に解説を付した。又、「純文学集一」（5巻）、「通俗文学集一」（7巻）、「探偵小説集」（9巻）、「戯曲・脚本集二」（10巻）の巻末に収録しなかった作品も含め、付録として「作品目録」を付した。「葉歩月作品集一」（19巻）には「葉歩月略歴」「葉歩月著作年譜」を付した。

●単行本二八冊、雑誌所収作品総一七〇篇を収録。著者は一五二名（日本人一〇四名、台湾人四八名）である。

19

葉歩月作品集一

●編集・解説十「葉歩月略歴」・「葉歩月著作年譜」
下村作次郎

●収録作品

- ①「長生不老」（台湾芸術社、一九四六年）
 - ②「白昼の殺人」（台湾芸術社、一九四六年）
- 他一九編収録

●内容

①若返り薬を発見した博士とその助手をまきこんだ、金の欲望と恋の火花がおりなす人間模様には、科学的トリックがからむストーリー展開は読む者をあきさせない。若返り薬で一儲けを企む二人の実業家と、その思惑とは別に助手をめぐる二人の娘の恋模様。思いの行き違いから娘の一人と結婚をした助手は、かつて相思相愛の娘が博士と結婚したことを知り、科学で幸福にはなれないと悟り命を絶つ。一方、博士は自らの脳若返りを果しているうちに薬の製法を忘れてしまう。

②登場人物はすべて中国人。謎を解いていく名探偵謝福文は長身でひげといった風貌で、どこかヨーロッパの探偵のそれを思わせる。事件は実業家羅大成が契約をめぐって某会社社長の王俊南と口論となり、その数分後、羅は無残な姿で発見される。誰もが王を犯人と疑わなかったが、その殺され方に不審を抱いた警察は探偵謝に依頼し、真犯人をつきとめようとする。羅が亡くなることで誰が一体利益を得るのか。謝の推理の線上に一人息子の羅東海が浮かんでくる。

20

葉歩月作品集二

●編集・解説
下村作次郎

●収録作品

- ①「七色の心」葉忠婉・周原朗校訂（草稿、一九六八年）

●内容

日本語で書かれた台湾最初の大河小説。三部からなる。時代は日本統治時代の一九二〇年代から戦後を経て、一九六〇年代の現代までを背景とする。主人公は、戦前から戦後の激動の時代を女手一人で夫の忘れ形見の三人の子供を育てることになった、秋卿である。彼女は二八歳の若さで未亡人になり、一人の乳呑児と八歳と五歳の二人の男の子を育てていかねばならなかった。モデルは作者の母である（未発表作品）。



新発掘の作品や新たな研究分野「通俗文学・探偵小説・随筆・戯曲・脚本・詩集」の作品群を網羅した画期的文学集。

●第一期刊行概要(編集複製版)

書名	編集	解説	ページ数	本体価格	ISBN
台湾長篇小説集一	下村作次郎	下村作次郎	530頁	9800円	89774-035-5
台湾長篇小説集二	中島利郎	柳書琴	380頁	8800円	89774-036-3
台湾長篇小説集三	河原功	河原功	540頁	9800円	89774-037-1
台湾短篇小説集	中島利郎	中島利郎	450頁	9600円	89774-038-X
台湾純文学集一	星名宏修	星名宏修	450頁	9600円	89774-040-1
台湾純文学集二	星名/中島	星名宏修	530頁	9800円	89774-041-X
台湾通俗文学集一	中島利郎	中島利郎	370頁	8800円	89774-042-8
台湾通俗文学集二	中島利郎	中島利郎	370頁	8800円	89774-043-6
台湾探偵小説集	中島利郎	中島利郎	390頁	9000円	89774-044-4
台湾戯曲・脚本集一	河原功	河原功	560頁	9800円	89774-046-0
台湾戯曲・脚本集二	河原功	河原功	440頁	9400円	89774-047-9
台湾戯曲・脚本集三	河原功	河原功	530頁	9800円	89774-048-7
台湾戯曲・脚本集四	中島利郎	中島利郎	410頁	9400円	89774-049-5
台湾戯曲・脚本集五	中島利郎	中島利郎	510頁	9600円	89774-050-9
台湾随筆集一	河原功	河原功	380頁	8600円	89774-052-5
台湾随筆集二	中島/下村	中島/下村	400頁	9400円	89774-053-3
台湾随筆集三	中島利郎	中島利郎	580頁	10000円	89774-054-1
台湾詩集	河原功	河原功	580頁	10000円	89774-055-X
葉歩月作品集一	下村作次郎	下村作次郎	330頁	8000円	89774-057-6
葉歩月作品集二	下村作次郎	下村作次郎	600頁	11000円	89774-058-4

第一回配本(02年7月刊)
1~4巻 揃本体 38,000円
ISBN4-89774-034-7 C3393

第二回配本(02年10月刊)
5~9巻 揃本体 46,000円
ISBN4-89774-039-8 C3393

第三回配本(03年1月刊)
10~14巻 揃本体 48,000円
ISBN4-89774-045-2 C3393

第四回配本(03年4月刊)
15~18巻 揃本体 38,000円
ISBN4-89774-051-7 C3393

第五回配本(03年7月刊)
19~20巻 揃本体 19,000円
ISBN4-89774-056-8 C3393

●第一期(全20巻)揃本体価格189,000円+税
●体裁 四六判・上製クロス装・ケース入り

ISBN4-89774-033-9 C3393

- 裏面の〈購入申込書〉に必要事項を明記の上、お近くの書店にお申し込み下さい。
- 各巻及び配本毎に分売いたしますが、少部数の刊行ですので、なるべく全巻でのご購入をお勧めいたします。

緑蔭書房

173-0004 東京都板橋区板橋1-13-1 電話03(3579)5444

日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集

中島利郎・河原功・下村作次郎編 植民地下台湾で活躍した代表的作家である楊逵、呂赫若、龍瑛宗、張文環などの「日本語作品」を集めた日本で最初の本格的な台湾人作家の作品集。別巻には発禁も含め資料的価値の高い「中国語作品」を収録した。
全5巻・別巻1／本体58,000円〈編集復刻・四六判〉

日本統治期台湾文学 文芸評論集

中島利郎・河原功・下村作次郎編 台湾における文芸評論が始まった一九二〇年代より四五年終戦までの日本統治期台湾の文芸関係を中心とした評論類(雑誌30誌、総485編、執筆者330名)を精選・集成した。
全6巻／本体60,000円〈編集復刻・A5判〉

日本統治期台湾文学 研究文献目録

中島利郎・河原功・下村作次郎編 日本統治期の台湾で活躍した代表的な台湾人・日本人作家の著作目録・研究文献目録と当時の主要文芸誌総目録、及び戦後の日本における台湾文学研究の現状を鳥瞰できる目録を収録。
本体12,000円〈A5判〉

近代朝鮮文学日本語作品集 第一期[1939—1945]全9巻

大村益夫・布袋敏博編 戦後初めての本格的な朝鮮人作家の日本語作品資料集成。日本語で書かれた作品が集中的に発表され、近代朝鮮文学が最高の高みに達した時代——李光洙、金史良など141人、473編の作品を収録。

- 創作篇 全6巻／本体68,000円〈編集復刻・A5判〉
- 評論・随筆篇 全3巻／本体36,000円〈編集復刻・A5判〉

近代朝鮮文学日本語作品集 第二期[1901—1938]全8巻

大村益夫・布袋敏博編 第一期につづき、日帝下、1901年～1938年に朝鮮人により書かれた日本語作品、日本語に翻訳された作品を選択、集成。朝鮮近代小説作家の祖・李人植の作品、朝鮮近代長篇小説の嚆矢・李光洙の『無情』、舞踊家・崔承喜の『私の自叙伝』等の他、金東仁、金斗鎔、朱耀翰、張赫宙、鄭然圭、李石薰、李孝石、俞鎮午などの作品群を多数収録。

- 創作篇 全5巻／本体56,000円〈編集復刻・A5判〉
- 評論・随筆篇 全3巻／本体34,000円〈編集復刻・A5判〉

緑蔭書房

〒173-0004 東京都板橋区板橋1-13-1 ☎03(3579)5444 (定価は本体価格+税)

取扱書店

〈緑蔭書房刊〉

監修＝中島利郎・河原功・下村作次郎

日本統治期台湾文学集成

第一期〈全20巻〉

ISBN4-89774-033-9 C3393

全巻購入致します

ご購入先

お名前

ご住所

ご連絡先

購入申込書